

児童の演奏技能の向上を目指した器楽学習 —音楽表現における言語化に着目して—

A Study of Instrumental Music Learning aimed at Improving Children's Performance Skills: Focusing on Verbalization in Musical Expression

山 中 和佳子

Wakako YAMANAKA

音楽教育研究ユニット

（令和5年9月28日受付，令和5年12月22日受理）

要 約

本研究では，小学校第3学年のソプラノリコーダー学習の導入期に焦点を当て，生田による「わご言語」の役割を主な分析の視点として，演奏技能の習得と向上における言語化の特徴，その効果と留意点について明らかにした。Task段階のわご言語の使用における学習展開に即した段階的深化，及びTaskとAchievementとの段階の間を橋渡しするわご言語との併用の必要性，言語とともに実演や動作等の感覚的なアプローチの併用が音楽表現の質を深める上で効果的であること等，このほか器楽学習と音楽表現活動の意義を指摘した。

1. はじめに

本研究の目的は，小学校音楽科の器楽学習における技能習得に焦点を当て，教師及び児童の音楽の言語化の様相と音楽表現との関係性，児童の身体への気づきを促す教師の働きかけの特徴を分析し，演奏技能の習得と向上における言語化の効果と留意点について明らかにすることである。

表現行為について，佐藤は自己の「何かを外部へと押し出し，外に何かを作っていくという活動の中で同時に自己の内部，人間の精神が作られて」いくと述べている（佐藤，2012，p.7）。つまり，表現行為は自分を取り巻く外界に向けた創造的行為であると同時に，自身の成長のための内的な創造的行為であるといえる。これらの創造的行為は，表現者が質的深まりを追求しそれを支える知識や技能を習得し向上させることによって，継続的に展開される。

子供たちが身につける資質・能力として知識・技能の習得や表現力の育成等が目指されている現在の学校教育において，表現活動内容を質的に深めていくこと，またそれを支える知識・技能を習得し向上させていくことは，生涯にわたる児童の

人間的成長において重要な活動である。

音楽について，岡田は「何よりもまず身体全体で『する』ものであるはずである。身体を動かしてみなければ，演奏してみなければ見えてこない，音楽の本質的な相というものが存在する」と指摘している（岡田，2004，p.9）。学校教育において音楽鑑賞とともに表現者の身体と深く繋がった演奏表現をすることは，児童のより深い音楽経験を促すことができる。

児童生徒の音楽学習の意義が問われ続ける状況に対し，本研究を通して，学校教育における児童の音楽表現活動の意義を再確認したい。

2. 関連する先行研究と本研究の分析の視点

2-1. 音楽表現行為の特徴

音楽表現行為には，表出される音事象とそれに呼応する演奏者や聴衆の身体があり，個々人の中で感情や身体性のメタ認知が行われたり，他者との共有を図るために様々な音楽事象や感情や感覚が言語化されたりしている。身体の認知に関しては，身体的行為の言語化の有効性について，人工知能研究分野でこれまで多く研究されてきた。柴

田は、身体知化（＝暗黙知化）における認知行為と実践的な身体的行為の統合の必要性を指摘している（柴田ほか，2003，p.78）。このように，表現技能の定着と向上においては，既存の知識に加えて身体感覚や身体操作の認知及びそれらの統合，さらにこれらの情報を踏まえた再表現というサイクルが行われている。

音楽表現のサイクルにおいては，「聴く」という行為は必須である。筆者は，これまでの研究の中で「比較聴取の活動は，新しい音楽的な気づきや学習課題を生み出す。耳で音楽を聴き取り，耳で判断する，ということを音楽学習の中心に置くことが大切である」（山中，2018，p.6）というように，「比較聴取」等による「聴く」ことの重要性を指摘してきた。

以上のことから，教科教育においても音楽表現活動では身体的認知及び音楽事象の言語化が必須であるとともに，「聴く」ことを土台に据えた音楽表現のサイクルを取り入れた授業展開が重要となる。

2-2. 「熟達化」における言語―「わざ言語」―

パフォーマンスの熟達化の研究分野において着目されてきたのが，生田が示した「わざ言語」である。生田は哲学領域における技能論を踏まえて，「わざ」の学びには2つの「学び」があることを指摘している。1つ目は，「Taskの学び」であり「いかにしたらある種の行為ができるかという『方法（やり方）の学び』」である。2つ目は，「Achievementの学び」であり「ある種の行為が生起してしまう『状態の学び』」である（生田ほか，2014，p.12）。これら2つの学びは連続した道筋ではなく異なる位相にあるものであり，「Taskそれ自体の『学び』が優先的に目指されることもあるとしても，Taskの『学び』はAchievementの『学び』を展望に入れている限りにおいての『学び』である」こと，「教える者と学ぶ者の間での『場』の共有に基づくAchievementの感覚の共有が不可欠であること」を認識する必要があると述べている（前掲書，p.26）。これらを踏まえて，生田は感覚の共有を促す独特な言語を「わざ言語」と呼び，次の3つの役割があることを示している（前掲書，pp.28-29）。

- ① Taskの段階である具体的な動きや形を指示するという役割。
- ② 直接的な動きの指示を超えて，教える者の身体感覚と学ぶ者の身体感覚の共有を促す役割を持ち，Taskの段階とAchievementの段階の間を橋渡しする役割。

- ③ Taskの指示という役割を超えて，意図的「教える」や意図的「伝える」とは異なる次元に立つ言語であり，卓越者が至ったAchievementの感覚を学習者自らが探っていくようにいざなうという役割。

TaskとAchievementは連続した道筋ではないため，この3つの役割も段階的なものではない。技能習得や向上の場面に同時に表れる場合もあるだろう。

筆者は拙稿の中で，「比喩表現」と「比喩的動作」の活用が教師と児童の感覚の共有に効果的であることを指摘した（山中，2019）。これらの研究を踏まえて，本研究では「音楽表現の言語化」について，わざ言語の3つの役割の中でも特に①と②のわざ言語の役割に着目し，授業時に用いられた指導言や発言を，①のわざ言語の役割（以後，役割①と称する）と，②のわざ言語の役割（以後，役割②と称する）に分類する。なお，本研究ではそれらを以下のように解釈し，分析を行うこととする。

役割①：身体の動かし方や位置や使い方に関する
具体的・直接的な文言

役割②：具体的な楽器奏法とは一見関係のない
「比喩表現」や，具体的な行為を補助する
ような形容詞や副詞（例えば「優しい」など）に分類される文言

3. 授業実践の概要と分析

3-1. 授業実践全体の概要

これまでの筆者の研究及び前述した関連分野の先行研究を踏まえて，福岡県の公立小学校教諭に対し，ソプラノリコーダーに初めて触れる学年である第3学年の授業実践を依頼した。以下がその概要である。

実践校：福岡県公立Z小学校第3学年1クラス 授業者：当該小学校A教諭 授業期間：2022年9月～2023年1月 分析対象の授業時間：3種類の題材の内1時間ずつ 学習教材：《あの雲のように》《山のボルカ》《エーデルワイス》 記録媒体：デジタルビデオカメラ1台，ICレコーダー1台

授業者のA教諭には，①「音を聴く」活動，②比喩表現や比喩動作と音楽表現とを関連付けた指導言や活動，③身体に意識を向けさせる指導言や活動の3点を授業時に意識するように依頼した。具体的な指導計画については，学習状況及び授業者と児童との関係性を重視しA教諭に一任した。授業実践時，筆者は観察のみ行った。コロナ対策のため，マスクを着脱して距離を取りながら授業を進めた。

なお、本研究ではソプラノリコーダーを「リコーダー」、第3学年のリコーダー学習期を「リコーダー導入期」と呼称する。対象の児童たちはリコーダーを初めて学習してから間もない時期にあり、筆者の観察は1学期の基礎的な学習後、久しぶりの学習となる2学期から始めた。分析にあたっては、1時間の授業内で主にリコーダーを用いた学習場面を扱う。

3-2. 学習教材曲《あの雲のように》の授業実践

(1) 授業の概要

学習教材曲《あの雲のように》は、ト長調四分の三拍子、使用する運指は一点ト音から二点ニ音内であり嬰へ音は出てこない。本授業は、この曲を初めてリコーダーで演奏する段階である。以下に、普通教室で9月20日に行われた授業の概要を示す。

導入	①曲の振り返りと音価（二分音符）の復習 ②CD模範唱と一緒に歌唱→伴奏音源で歌唱 ③拍子の確認と3拍子の指揮
展開	①リコーダーで演奏することを提示後、児童による今日のめあての考案：「音符を読んできれいにリコーダーを演奏しよう」 ②五線譜上の音階で音名を学習 ③音名で1段目を歌唱した後、グループで歌唱 ④リコーダーでの演奏：音名を確認、4段目まで何回もゆっくり演奏
終末	①最後に全曲を通してゆっくり演奏 ②ワークシートによる今日の振り返り

(2) 授業の発話記録と分析

音名で旋律を歌唱した後、リコーダーを用いた学習（展開④）に移った。A教諭は、教卓上にタブレットを設置しモニターとつなぎ、児童が大きな画面で教師の運指を視覚的に確認することができるように工夫している。モニターには左右反転で映るため、画面左に左手がある。そのため、児童が自分の運指を上から見た時と同じ位置に同じ手があるように見えている。以下は、展開④の冒頭の発話記録である。

教師の発言や手立て、様子	児童の発言や様子
・リコーダーでやってみようか。 ・出来そう？	・はい
・じゃあ背中を伸ばしてごらん？ ・で、足はびったんこ。 ・リコーダー吹くときは、自分のお腹と机の間に？	(教師の言葉を聞いて多くの児童が椅子を少し後ろにずらす)
・そう、すき間を開けて～ ・肘はどうするんだっけ？机につくんだっけ？	・つかない！（わざと肘をついてみながら児童も見られる）
・つかないね。 ・そして肩の力は？	・ぬく！（教師の言葉で姿勢を直す）

・そしてくわえる時は？いっぱいくわえるんだっけか？ちょっとだったか？	・ちょこっとー
------------------------------------	---------

リコーダー演奏に入る冒頭で、A教諭は身体の使い方として姿勢と構え方、また歌口のくわえ方の確認をし、児童はそれに対して自分の身体の位置や持ち方を変えたりしている。リコーダーを構えながら一つずつ確認することで、リコーダー演奏における基礎的かつ重要な身体の使い方の定着を図っている。

次に、展開④の場面の発話記録を示す。

教師の発言や手立て、様子	児童の発言や様子
・最後、ドレー。	(教師の歌の後演奏。多くの児童はドレーは吹けている。)
・すごい！ ・もう一回聴いてね。 (教師が「ドレー」と模範演奏) ・レは後ろを外すだけよ。	(教師の発言の後、2回続けて演奏)
・オッケー、じゃあ初めから。 (旋律を音名で歌った後、演奏を促す。)	(冒頭4小節をゆっくり演奏。ドシドの指の入れ替えが難しい様子の児童が多い。) (数名挙手)
・出来た人？ ・じゃあ独りでやってみようって人？ ・Bさん（手を挙げた児童Bを当てる）	・児童B演奏。（タンギングはしていない。リズムが違うが、正しい運指でゆっくり演奏） (全員拍手)
・おー（拍手）。 ・もっと息をね、小さくしてごらん？今のね、シャボン玉が割れてしまうかもしれないから。 ・これくらい。（息を少な目に吹き込みながら模範演奏） ・みんなで吹いてみよう。	(児童全員で演奏)

この発話記録は、冒頭の旋律4小節内の一点口音→二点ハ音→一点口音→二点ハ音の指の入れ替えをゆっくり行った後の学習場面である。児童は、モニターに映った教師の運指を見ながら後を追うように演奏している。この場面では、運指に関して各指の動きを具体的に確認する文言や、息の使い方について「小さく」といった息の量のコントロールを促す文言が見られる。さらに、息の使い方については「シャボン玉が割れてしまう」のような比喩表現を重ねて説明しており、この言葉がけの直後に模範演奏を行っている。この後の児童全員による演奏では、リコーダーの音色がそれまでよりも柔らかく音程のずれが少ない澄んだ音に変化している。

(3) 考察

これらの活動から、リコーダー導入期の指導言の特徴として、「各音の指使い」「姿勢」「くわえ

方」という基礎的かつ重要な奏法への言及が多いことが指摘できる。これは、「わざ言語」の役割①に関する具体的な動きや形を指示する言語に分類されるものである。他方、「わざ言語」の役割②に該当する文言には、比喩表現が少ない回数で用いられている。導入期段階での言語化については、まずは演奏時の身体的な確認要素を児童の意識に定着させるために、役割①のものが多くなる傾向があることがわかる。

言語化の他に、視覚的に情報を得られるモニターを使っていたことが、技能の習得を支える重要な補助手段となっている。さらに、教師の模範演奏を合わせることによって、身体操作のイメージの共有と聴覚へのアプローチが行われており、それが児童の演奏表現の質的变化へとつながっていたことが見て取れる。基礎的な技能の習得においては、視覚、聴覚の両方にアプローチする情報提示、及び言語化を組み合わせることが効果的であるといえる。

3-3. 学習教材曲《山のポリカ》の授業実践

(1) 授業の概要

《山のポリカ》はハ長調四分の二拍子で、音域は一点ホ音から二点ハ音内で構成されている。右手を使う低音域の学習が意識された軽快な雰囲気のある楽曲である。以下に、普通教室で10月27日に行われた《山のポリカ》の学習2時間目の授業の概要を示す。

導入	①前時のワークシート振り返り ②ポリカの踊りと音楽の視聴と拍子の確認
展開	①ポリカのイメージを共有した後、児童による今日のめあての考案：「山のポリカをリズムよくきれいな音で演奏しよう」 ②一度ゆっくり通して演奏 ③曲のイメージに合うように工夫点を考えて共有 ④難しいと感じる箇所の運指をグループで確認 ⑤最後のフレーズの吹き方の工夫を確認しながら演奏 ⑥全員で最後まで演奏
終末	①個別に最後のフレーズだけ演奏発表 ②ワークシートによる今日の振り返り

(2) 授業の発話記録と分析

導入①では、前時に「低いミとファをどうやって吹けばいいか」について児童が記入したワークシートの振り返りを行っている。以下は、A教諭が取り上げて全員に共有した児童の記載内容である。

<ul style="list-style-type: none"> ・姿勢をよくすると低い音が良く出た ・跡がつくぐらいぎゅっと押さえる ・目線、前を向く ・口の形を丸くするといい ・トゥって言ったら低いミが出た ・低いミは水が落ちるように吹くといい
--

この振り返りでは児童が姿勢とくわえ方、指の押さえ方、タンギングと息の使い方について着目しており、息の使い方については比喩表現を用いている。これを記載した児童によれば、使用教科書に掲載されていた「水が出ているホースの図」から想像して答えたものだということである。

次に、展開③の学習場面を取り上げる。ここでは、1回ゆっくり通して演奏した後、A教諭はみんなが目指すポリカにするにはどうしたらいいか、どこに気を付けたらいいと思うかをワークシートに書かせて発表させた。以下は、児童が特にタンギングに着目して発表した場面の発話記録である。

教師の発言や手立て、様子	児童の発言や様子
<ul style="list-style-type: none"> ・じゃあ聞いてみよう。 ・ペロをどうしたらいいのかな？ ・他にペロに関係してる人いる？ 	<ul style="list-style-type: none"> ・児童C：ペロの使い方を気を付ける ・児童D：・ペロでリコーダーをつつく
<ul style="list-style-type: none"> ・リコーダーのどこをつつくん？ ・リコーダーの吹き口のところを舌でつつくんね。なるほど ・もう一つ言ってたね、ソソラシド（最後の旋律）をどうしたらいいって言ってた？ 	<ul style="list-style-type: none"> ・リコーダーのあなが空いている所 ・児童E：えっとそこを強すぎない感じで。
<ul style="list-style-type: none"> ・強すぎないように吹けばリズム良くなる感じ？ ・へーやってみよう！ 	(多くの児童がうなずく)
(中略)	
<ul style="list-style-type: none"> ・トゥーと何があったかな？ ・じゃあ低いファとミ音のところはなんて吹けばいいの？ ・そして高い音は？ ・こういう風に舌を使うと、リズムよくなりそうかなあ。 ・じゃあやってみよう！（ティとトゥで色分けして一緒に歌いながら楽譜に○を書き込む） 	<ul style="list-style-type: none"> ・全員で：ティー！ ・全員で：トゥー ・全員で：ティー！
	(多くの児童がうなずく)
	(全員でティとトゥで歌う)

A教諭は、タンギングに着目した児童たちに対して、舌をどのように使うのかといった具体的な身体操作を考えさせ、「どこをつつくん」というようにリコーダーと舌との位置関係を確認させている。また、めあての「リズムよく」に合う演奏にするための工夫については「強すぎない感じ」で旋律を吹く、という児童の回答を導き出している。

次に、トゥとティという発音を用いてタンギングの違いを確認することで、口腔内の広さと息のスピードの違いを体感させている。難しい運指の箇所があったため「運指とタンギングだけやってみよう」と投げかけ、リコーダーを構えて運指に合わせてトゥとティで歌い分け練習する時間を取っている。この後の児童の演奏は、最初の演奏よりも音のキレが明確になっていたことから、タンギングを意識した児童が多くいたことが推測される。

展開⑤では、息の量に関するやりとりが行われた。以下は、展開⑤で1人ずつ児童が冒頭4小節を演奏したときの発話記録である。

教師の発言や手立て、様子	児童の発言や様子
(児童Fにひとりで吹かせる)	・児童F演奏(運指はあっているが、ファとミの音がひっくり返って明確な音が出ていない)
(拍手)	(全員拍手)
・あと何を気を付けたらいいと思う？	・(児童が口々に) <u>タンギング！押さえる力！ちょっと強く、あとができるくらい。</u>
・指をどうしたらいい？	(全員で演奏する)
・みんなでやってみよう！	・児童G演奏(低音ファとミが少し出しにくそうだが、澄んだ音でタンギングできている)
・Gさんをちょっと聴いてみて。(児童Gにひとりで吹かせる)	・児童口々に： <u>タンギングできてる！速さもばっちり。</u>
・どうだった？	(うんうんとうなずく多くの児童。拍手)
・今日のめあてに近づいてる？	・児童G：孔があかないようにやった。あと息の強さ。
・おー！(拍手)	・児童G：シャボン玉が割れないように。
・Gさん、どんなことに気を付けてやった？	・児童G：ちょっとだけ違う。
・息の強さをどうしたの？	・児童G：高い音の部分。
・シャボン玉が割れないように？息の強さは全部同じ？違う？	(全員で演奏)
・どこを強くしてる？	
・高い音の部分、 <u>ちょっと息を強くしてる</u> んだって。みんなやってみよう！	

上記の場面では、ひとりの児童の演奏の後、拍手で肯定しながら、何を改善すればよいかについてA教諭が問い、児童たちが自分の考える改善点と方法を述べている。A教諭は児童が答えた「気を付ける奏法や視点(指孔の押さえ方や吹き込む息量)」に対して、「それをどのように改善するか」をさらに問い直しており、改善のための具体的な方法を全員で共有している。その後すぐに全員で演奏することで、共有した改善方法をすぐに演奏へとフィードバックする手立てを取っている。また、この場面ではこれまでに共通理解をしてきた比喩表現「シャボン玉が割れないように」を用いている。最後の全員での演奏では、児童たちは息を少し多めに入れてコントロールしており、音が鋭くなりすぎる少し手前の、明瞭な音色で演奏している。

終末②では、児童たちがワークシートに「自分で今日工夫できたこと」を書き込んでいる。以下は、児童の記述内容の一部である。

<ul style="list-style-type: none"> ・今日穴をちゃんとふさいだら、ソソラシドが吹けた ・低いミを吹くときは優しく吹いたら良かった ・すき間に気を付けた

<ul style="list-style-type: none"> ・指の力の入れ方を変えてみた ・ソソラシドが難しかったけど、指に力を入れて優しく吹いたら音ができた ・指をぎゅっとした

この内容にはリコーダーの孔と指の関係、息の使い方への振り返りが見られ、「何を」だけでなく「どのように」という具体的な改善方法への意識が多くなされていることがわかる。また、比喩表現は見られないが、「優しく」といった形容詞で身体操作の程度を表そうとしていることが見て取れる。

(3) 考察

授業を通して教師及び児童の発言をみると、わざと言語の役割①を担った文言が多く用いられている。この段階では、3-2《あの雲のように》の学習時と同様に、具体的な身体の使い方を意識的に身体に覚え込ませることが目指されている。わざと言語の役割②に関する比喩表現は、児童全体で既に共通理解されているものに終始している。

本時の特徴的な場面は、A教諭が「どのようにすれば改善するか」という具体的な改善方法を児童に問いかけている場面である。A教諭は演奏を必ず振り返り、児童に修正点を言語化させて全体共有し、その後すぐに演奏することで修正点をフィードバックさせている。「聴く」という言葉は用いられていないものの、これらの手立てによって児童が自分自身の演奏に耳を澄ませ、それに対して身体的なコントロールを意識的に行うことができている。授業後半の演奏の質の向上とともに最後に児童が記入したワークシートの振り返りの部分には、この授業で得た自分なりの改善点や工夫点が反映されている。

以上のことから、演奏後に自分や友達の演奏を評価することに加えて、身体の状態や具体的な身体操作そのものを言語化することは、児童が自分の演奏時を客観的に振り返る習慣づけや、思ったように演奏できなかった時の改善方法の気づきの引き出しを多く持つうえで、重要な手立てであると指摘できる。

3-4. 学習教材曲《エーデルワイス》の授業実践

(1) 授業の概要

この授業実践は、1年間の中でリコーダー学習のはほぼ最後にあたる時期の2023年1月27日に行われた。学習教材曲《エーデルワイス》は、ハ長調四分の三拍子、音域は一点ホ音から二点ニ音までで広くはないが、4度や5度の比較的広い音程が多用された旋律の上行形下行形が特徴的であ

り、それに伴う息のコントロールが必要となる曲である。本時は《エーデルワイス》のリコーダー学習の2時間目であり、授業は普通教室で行われた。以下は、授業の流れの概要である。

導入	①前時を振り返り、音名で歌唱 ②手で弧を描きながら歌唱し、「フレーズ」を確認
展開	①児童によるめあての考案：「エーデルワイスをフレーズに気を付けて演奏しよう」 ②教師が刻む拍に合わせてリコーダーで個人練習 ③全員でのリコーダー演奏を録音 ④録音を聴き思ったことをワークシートに書き、発表 ⑤黒板に貼った楽譜で休符とブレスを確認 ⑥何回か演奏後、2つのグループでフレーズごとに交互に演奏
終末	①いくつかの2人グループが演奏し、それを聴く ②ワークプリントに自分が今日やったコツを記入

(2) 授業の発話記録と分析

導入②で、A教諭は「音の虹を作しましょう」と呼び掛け、児童とともに歌いながら手で旋律の進行に合わせて弧を描く活動を行っている。これにより、ほぼ全員の児童が弧を描きながら4小節を一息で歌っており、息を保持する加減やフレーズの始まりと終わりを感じながら、4小節をつながりのある一つのフレーズとして捉えている様子がうかがえる。

展開②の個人練習では、全ての児童が肘をつかずに、背筋を伸ばして黒板の楽譜を見ながら演奏している。これまでの学習によって、リコーダーの演奏に適した姿勢が定着しつつあることが見て取れる。

展開⑤では、冒頭から2小節後に括弧書きされたブレス記号があることを児童が指摘したため、A教諭は「どうしても息したい人はしていいよ」と答えている。以下は、その後に続く息（ブレス）についての発話記録である。

教師の発言や手立て、様子	児童の発言や様子
<ul style="list-style-type: none"> ・だけど、こんなのはだめ。 ・先生吹くね。 (リコーダー演奏：ミーソレー・・・ドーソファー・・・←2小節で大きく切り、口を心もち大きく開けて息を吸う演奏) ・なんでダメだと思う？ ・Hさん。 	<ul style="list-style-type: none"> ・はい！（手を挙げる） ・児童H：息吸う時間が長い。
<ul style="list-style-type: none"> ・息吸う時間が長いと、フレーズが？ ・途切れてしまうよね。 ・なので、息吸う時は…(リコーダー演奏：2小節の最後の音をぎりぎりまで演奏して、少しだけ吸って次の2小節を演奏) ・いまどうやった？さっきと比べてどうやった？ 	<ul style="list-style-type: none"> ・(児童が口々に) <u>みだれる、切れちゃう。</u>
	<ul style="list-style-type: none"> ・(口々に) <u>口が空いてない。少しの間。短かった。</u>

この場面では、A教諭が2種類の息の吸い方で

演奏して比較させている。実際に模範演奏をすることで、児童たちは息継ぎにかけられる時間の長さの違いとそれによって引き起こされる演奏の不自然さを聴き取っている。さらに、視覚情報から口の大きさの違いもあるということにも気付いている。

展開⑥では、2つのグループに分かれて4小節のフレーズごとに交互に演奏する活動が行われた。以下は、その活動時の教師の発言である。

<ul style="list-style-type: none"> ・じゃあだいたいうまくなってきたから、こっちのグループとこっちのグループとで吹いてみよう。 ・なんで先生がこんなことをやっているかっていうと、めあてなんだったっけ？(児童が口々にフレーズと答える) ・フレーズを意識してできるように、こっちのグループとこっちのグループでバトンタッチしてほしいの。
(手で弧を描きながら冒頭から4小節まで歌い、4小節目の最後で右手と左手を合わせる動作を行っている。次の4小節を歌い続けながら、先ほどとは逆の方向に弧を描いて右手と左手を合わせる動作を続ける。)

この場面の狙いは、2つのグループで旋律を吹き合うことで、フレーズのひとまとまりとフレーズ同士のつながりを把握させることである。A教諭は「バトンタッチ」という比喻表現とともに、歌いながらフレーズの進み方に合わせて手で弧を描き、フレーズの変わり目で右手と左手でバトンを受け渡すような動作を付けている。歌唱による耳からの情報と手や身体を使った視覚的な把握、比喻表現による言語を通じた把握をさせようとする様子がうかがえる。

《エーデルワイス》の冒頭「ミーソレー」に出てくる二点二音は、指孔を1つしか塞がないため、何も意識しない場合には音程が上ずり、音色が特に明るく鋭くなり、フレーズ内でその音だけ飛び出して聴こえるという問題が生まれる。しかし、この後の児童全員の演奏は、上行形と下行形の音色や音程のつながりが自然であり、この問題は聴かれなかった。

2つのグループに分かれた全員での演奏に続いて、終末①ではペアで同じように演奏を発表させた。以下がその時の発話記録である。

教師の発言や手立て、様子	児童の発言や様子
<ul style="list-style-type: none"> ・じゃあIさんとJさん。 ・さあ、うまくバトンがつながっているかどうか、みんな聴いてね、フレーズね。 	<ul style="list-style-type: none"> ・児童I：前半4小節続けて演奏。音は柔らかく丁寧なタンギング。 ・児童J：音が曖昧な箇所があるが、タンギングしながら後半4小節続けて演奏。(全員拍手)
<ul style="list-style-type: none"> ・オッケー！息の使い方上手だね。シャボン玉が割れないように吹いてる。素晴らしい！ ・緊張した？緊張したねー 	(児童うなずく)

<ul style="list-style-type: none"> ・じゃあ次やってもらおうかな。KさんとLさん。 ・いきますよ、じゃあ聴いてくださいーい。 	<ul style="list-style-type: none"> ・児童K：前半4小節続けて演奏。運指は少し間違えたが音は澄んでいて柔らか。タンギングはきつくない。 ・児童L：後半4小節続けて演奏。少し運指があやふやだが、音をつなげようとする感じで身体を少し動かしている。音色は柔らかく澄んでいる。 ・(2人の演奏が終わった後、わーすごい、とつぶやく児童たちが多く。拍手する児童もいる) ・児童M：息が<u>びったり合ってて、なんかリレーみたい</u>になった。 ・児童N：最初間違えてたけど次から<u>リレーみたい</u>に走って駆け上がってまた駆け上がってみたいになった…
<ul style="list-style-type: none"> ・どうだった？じゃあ感想を聴かせて。Mさん。 ・ちゃんと、<u>Kさんが投げたボールを意識しながら受け止めてた</u>ね。Nさんどうやった？ 	
<ul style="list-style-type: none"> ・なるほどね、リレーね！ 	

この場面のペアによる演奏では、前半に吹いた児童に対して、後半の児童が前フレーズの終わるタイミングをつかみながら音色や音量をそろえて演奏しており、同じ曲として聴こえるように意識している様子が見られた。また、4人とも4小節を一息で吹き切ろうという意識から、必然的に息のコントロールを行っており、その結果、音色は柔らかく鋭くないタンギングでの表現となっている。演奏に対する児童の発言には、「リレー」という言葉が用いられたが、A教諭が前の活動で「バトンタッチ」という言葉を使ったことから派生した発言であろう。

この場面で、A教諭は児童の息の使い方に着目し、「シャボン玉が割れないように吹いてる」というようにこれまで使ってきた比喩表現を用いて評価している。また、「Kさんが投げたボールを意識しながら受け止めてた」という新しい比喩表現を用いている。A教諭はフレーズのつながりだけでなく、音色や音量といった音楽表現全体の児童同士のつながりを「ボールを投げてそれを受け止める」という比喩表現で表したと考えられる。

最後の活動の終末②では「自分が今日やったコツ」をワークシートに書く活動が行われた。以下は、児童が記入し発表した内容の一部である。

<ul style="list-style-type: none"> ・息をやさしく吹いたらきれいなフレーズになる ・音色と音色をきれいに合わせる ・休みの時は休みで合わせる ・フレーズの時に息を続けて、タンギングに気を付けるときれいに吹ける ・切れるところを気を付けた
--

「息をやさしく」「息を続けて」といった文言から、息の使い方がフレーズ感につながると実感している児童がいることがわかる。また、音色や休符を「合わせる」といった文言からも、他者との演奏時に意識する点を自分なりに体得していったことがわかる。

(3) 考察

この授業の特徴の1つ目は、教師の模範演奏による比較聴取が行われていたことである。この手立てによって、児童たちは聴覚的・視覚的な情報の双方から、演奏の質の違いとそれを創り出している身体操作の違いとを結びつけていたことがわかる。

2つ目は、教師が1つのことを伝える際に、比喩表現・歌唱（演奏）・動作を組み合わせで行っていたことである。歌唱やリコーダー演奏とともに行われた教師の動作は、個々人の音楽表現へのイメージを促進させ、息やタンギングなどの身体的なコントロールへ意識を向けさせるだけでなく、他者の演奏の特徴を耳で捉えながら、それに合った演奏を選択することにつながっていた。この手立ては、言葉では伝え難い音楽の時間的流れやタイミングを視覚的に捉えさせるうえで有効であったと考えられる。

指導言については、わざと言語の役割①に分類される文言の使用があったが、従来の授業で使用されていた基本的な姿勢等の定着を目的とするものは少なかった。その代わり、曲想に合った違和感のない各フレーズの流れとそれらのつながりという音楽表現の質を深めることを目的とした文言が使われていた。

わざと言語の役割②に分類される文言としては、これまでより多く比喩表現が用いられている。これらの比喩表現では、児童と教師が生活の中で経験し共有できるような、形や活動や動作に関連した文言が使用されている。このように比喩表現された事象を想像することは、その時の心情や身体的な操作のイメージや感覚を呼び起こす。これらを演奏時の身体のコントロールや意識へと重ねることにより、「フレーズ感」に対する児童の感覚的な理解、及び音楽表現の質への深まりが促されたと考えられる。

4. おわりに

本研究では、リコーダー導入期の第3学年の学習を対象に分析を進めた。その結果、音楽表現の言語化の特徴として、以下のことが指摘できる。

・楽器の導入期では、Taskの段階である役割①

の文言が多用されている。その特徴には、学年半ばでは基礎的な楽器奏法に関するものがほとんどであったが、学年末では音楽表現の質を深めるために必要となる身体的なコントロールに関する文言へと変化したことが挙げられる。

- ・Task の段階と Achievement の段階の間を橋渡しする役割②に分類される文言は、役割①を補助する形で多少用いられている。それらの文言は、教科書に掲載されていたり、生活の中で全員が体験したりしている活動や動作に関するものである。

次に、表現技能の習得と向上における言語化の効果及び留意点について、以下のことが指摘できる。

- ・楽器の導入期においては、役割①の文言の使用目的を、基礎的な身体操作等の定着を意図するものから、音楽表現の質を深めることを意図するものへと変化させることが効果的である。
- ・役割①の文言のみでは、個別の微細な身体操作を過度に意識させ、演奏行為を機械的な運動にする恐れがある。役割②の文言は、イメージを通して身体感覚や感情を想起させることができるため、役割①の身体操作を統合することができる力を持っている。したがって、役割①とともに役割②の文言も用いることが重要である。
- ・演奏→客観的評価・修正点の言語化と共有→その後すぐに演奏というサイクルは、演奏時に意識する点や改善点に対する児童ひとりひとりの気づきを促進できるため、効果的である。
- ・言語のみの説明や提示に留まるのではなく、実演や動作といった視覚・聴覚などへの感覚へのアプローチ方法を併用することが効果的である。また、児童と教師がともにこれらを用いて、感覚の共有を行うことが重要である。

最後に、器楽学習及び音楽表現活動の意義を述べたい。楽器演奏は身体とは切り離せない。器楽学習を通して、楽器演奏時の身体の意識的コントロールから無意識的な状態になるまで児童が楽器と自分の身体とを対峙させることは、児童の身体感覚を育成するとともに、身体の発達を支えることにつながる。

音楽表現活動においてその質を深めるためには、自分の状態や音楽の質を客観的に分析する能力が必要となる。時間芸術である音楽の分析、他者との共有にあたっては、様々な音楽事象を言語化する能力が非常に重要な核となる。この能力は、感覚的、抽象的なものに対する分析力や共感力や発想力、そこからさらに発展させる創造力等の、生涯にわたって必要となる能力の育成につな

がっている。したがって、学校教育では、音楽そのものに浸り楽しみ味わうという経験を担保しながら、児童の音楽的語彙力を伸ばすことも目指す必要がある。

もちろん、音楽が言葉では伝えきれないのは自明である。児童たちが、学校教育の中で、言葉だけでは音楽の全体像やそこから生まれる感情の全てを伝えきれないことを知り、身体全体を通して音楽の奥深さや面白さを体験することは、人間の営みにおける音楽の存在意義を知るうえで重要である。指導者は、音楽を言語化することの効果と問題点、重要性和その限界を自らの体験をもって理解し、授業実践を行うことが求められる。

【付記】

福岡県公立 Z 小学校児童のみなさんと A 教諭、及びその他の先生方に、心より授業実践協力の感謝を申し上げる。

なお、本研究は、科学研究費助成事業分担金若手研究 (B) 科研番号 17K1404 (研究代表者：山中和佳子) の助成を受けたものである。

【参考文献】

- 柴田庄一ほか (2003) 「技能の習得過程と身体知の獲得—主体的関与の意義と「わざ言語」の機能—」名古屋大学『言語文化論集』第 24 巻第 2 号, pp.77-93。
- 岡田暁生ほか (2004) 『ピアノを弾く身体』春秋社。
- 古川康一ほか (2009) 『知の科学 スキルサイエンス入門—身体知の解明へのアプローチ』オーム社。
- 金子明友 (2009) 『身体知の形成』明和出版。
- 佐藤公治 (2012) 『音を創る, 音を聴く 音楽の協同的生成』新曜社。
- 生田久美子, 北村勝朗編著 (2014) 『わざ言語—感覚の共有を通しての「学び」へ』慶応義塾大学出版株式会社。
- 山中和佳子 (2018) 「リコーダーによる表現の工夫に焦点を当てた小学校音楽科の器楽指導」『福岡教育大学紀要, 第 67 号, 第 6 分冊』pp.1-7。
- 文部科学省 (2018) 『小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 音楽編』株式会社東洋館出版社。
- 山中和佳子 (2019) 「音楽表現の質の深まりを目指した小学校音楽科の器楽学習」『福岡教育大学紀要, 第 68 号, 第 6 分冊』pp.1-8。